2025 年３月 30 日（日）「三人の友人の来訪」

ヨブ 2:11-13

11 さて、ヨブの三人の友人は、ヨブに臨んだこのすべての災いを耳にし、それぞれの場所から
やって来た。それは、テマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファルである。彼らは互
いに相談して、ヨブをいたわり慰めるためにやって来た。 12 遠くから目を上げて見ると、それがヨ
ブであると見分けることもできなかった。彼らは声を上げて泣き、それぞれ上着を引き裂き、天に
向かって塵をまいて自分の頭の上に散らした。 13 彼らは七日七夜、ヨブと一緒に地面に座って
いたが、その苦痛が甚だしく大きいのを見て、話しかける者は一人もいなかった。

【序論】

ヨブ記は、人にとっての「慰め」とは何であるかを考えさせられる書です。試練の中にある人に対してどういう言葉を投げかけるべきか、如何なる態度をもって接するべきか。人の心は複雑であり、私たちが善かれと思って行なったことが逆効果になってしまうこともあります。そっとしておいてあげることの方が当事者にとってありがたい場合もある。反対に、意図せずに語った言葉が誰かにとっての慰めになっていたということを後から聞くこともあるでしょう。個々人の性格や状況に応じた判断が求められることであり、型にはめることはできません。それでも、一つだけ共通して言えることはあります。それは、人は共感を求めているということ。自分の思いを否定することなくそのまま受け止めてくれる人を必要としているということです。

今日登場するヨブの三人の友人は、３章以降で真逆のことをやってしまうのですが、少なくともここではふさわしい行動を取っていると言えそうです。彼らも元々ヨブと議論するために来たわけではなく、本心として慰めを与えたいという思いに駆られて集まったはずなのです。

【本論】

ここまでの経緯を振り返りますと、ヨブは二つの意味において大きな試練に遭ってきました。第一に、家族や財産という、彼に付随していたものがことごとく剥ぎ取られたということ。第二に、健康が取り去られ、とてつもない肉体的苦痛に見舞われたということです。これまでのところ、ヨブが遭遇した試練をめぐる「神学的な考察」について議論する「対話者」はまだいませんでしたので、問題はヨブの中で自問自答するに留められていました。しかし、今日から登場する三人の友人によって、ヨブに降りかかった試練の解釈をめぐる討論が始まり、ヨブの心の中に閉じ込められていた思いが噴出することになります。そして、このことが第三の試練としてヨブを更なる苦しみへと追いやっていくのです。

本論１．三人の友の来訪

さて、ヨブの三人の友人は、ヨブに臨んだこのすべての災いを耳にし、それぞれの場所からやって来た。それは、テマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファルである。彼らは互いに相談して、ヨブをいたわり慰めるためにやって来た。（2:11）

三人の友人がヨブとどういう関係だったのかは分かりません。ですが、パレスチナ近郊を転々としていた遊牧民の豪族であったと思われ、ヨブとは社会的な身分の高さゆえの関わりがあったと考えられます。また、彼らはヨブよりも年上であったことも分かっています。エリファズがこのように言っているからです。

私たちの中には白髪の者も老いた者もいて、あなたの父よりも年上だ。（15:10）

三人について、分かりうる範囲で調べてみました。

① テマン人エリファズ

「テマン」はヘブル語で「南」という意味で、死海の南部にあるエドムの村出身だと思われます。エドム人はエサウの子孫であることから、イスラエル民族とも近い関係にあった人かもしれません。「エリファズ」という名前の意味は、ヘブル語で「神は純金」です。

② シュア人ビルダド

アブラハムと後妻ケトラとの間に生まれた末息子に「シュア」という人物がいますが、その名前と関係があるならシュアの子孫であった可能性があります。シュアの甥であるシェバはアラビアの一部族であることからも、アラビア地方から来た人ではないかと想像されます。「ビルダド」という名前の意味は諸説ありますが、アッカド語なら「ハダドの子」、エモリ語なら「ダドが産んだ」、アラム語なら「ベルは愛する」などが提案されています。

③ ナアマ人ツォファル

「ナアマ」はヘブル語で「楽しみ」という意味であり、ユダに属する町の名前としても登場します（ヨシュア 15:42）。カレブの子の中にも「ナアム」という人物がいることから、関係性が指摘されてもいます（Ⅰ歴代 5:15）。「ツォファル」という名前の意味は、ヘブル語で「小鳥のようにさえずる」「跳びはねる」「編みかご」など。

三人の友人たちはヨブの噂を耳にし、互いに連絡を取り合って落ち合い訪問することにしました。当時は郵便システムがありませんでしたが、アラビアの遊牧民の間では口伝えでの通信手段があったと言われます。ヨブが試練に遭ってから相当の日数が経過して彼らは到着したようです。彼らの当初の目的は「**いたわり慰めるため**」でした。

本論２．ヨブを見た衝撃

遠くから目を上げて見ると、それがヨブであると見分けることもできなかった。彼らは声を上げて泣き、それぞれ上着を引き裂き、天に向かって塵をまいて自分の頭の上に散らした。

(2:12)

遠路訪ねてきた友人たちが目にしたものとは何だったのでしょうか。彼らは道中何を想像し、何を話し合いながら来たのでしょうか。慰めの品なども用意していたのでしょうか。彼らの脳裏には、最後に会ったときのヨブの姿がイメージとして残っていたと思います。かつてヨブの家に招かれて豪華な食事を振る舞われた経験もあったことでしょう。素敵な家族に囲まれ、たくさんの家畜を保有し、召使いたちが恭しく仕えていたと想像します。しかし、あの家族はもはやおらず、家畜の檻はどこを見ても空っぽ、家にはやつれた妻だけが取り残されていました。妻に悔やみを伝え、当のヨブは一体どこにいるのかと問うと、集落の入り口のゴミ捨て場だという答えが返ってきました。前回の説教で、ヨブが灰の中に座ったことについて以下のように説明させていただいたのを覚えていらっしゃるでしょうか。

「『灰の中』とは、集落の入り口にあったゴミ捨て場のことで、そこには土器のかけら、動物の糞や死骸なども捨てられたそうです。災いに遭った者はそのような不衛生な所に座り、万が一伝染病であった場合のことを考えて人を避けたとも考えられます。」

彼らがゴミ捨て場に駆けつけると、そこには見知らぬ男が座り込んでいました。彼は全身に腫瘍ができており、あまりに引っ掻きすぎて血にまみれ、顔は崩れて誰だか分からない。まさにこの世から捨てられたような男が独りうずくまっていたのです。三人は話し合います。「はて、ここにヨブがいると聞いてきたが、我々は場所を間違えたか」「この人に聞いてみることにしよう」「もし、この近くにヨブという男がいると聞いて来たのですが、ご存知ありませんか」。その男は目を上げると答えました。「これはこれは、エリファズさん、ビルダドさん、ツォファルさん。長いことお目にかかっておりませんでした。私がヨブです。わざわざおいでくださったのですか」。三人は顔を見合わせました。「これがあのヨブだって？あの高貴で貴賓に満ち、懐が深く、多くの人をもてなし、すべての人から尊敬されていたあのヨブ？信じられない。これほどまで変わり果てた姿と対面することになろうとは。」

友人たちは現実を受け入れることができず、これほどまでにヨブの人生を転落させた神に叫ばずにはおられませんでした。「上着を引き裂く」とは、悲しみや悔い改めを表す表現。「天に向かって塵を撒く」とは、ヨブに災いをもたらした方に対する抗議の意味があるのでしょう。彼らが「声を上げて泣いた」ところに、ヨブの心の叫びの代弁があるように思えます。彼らがヨブを見たとき「それがヨブであると見分けることもできなかった」と言われていますが、この表現は私自身が経験したこととも重なります。薬害で大変な目に遭ったとき、私も全身がただれて地獄の日々を過ごしていました。そのような中、滋賀県の叔父の教会に泊まらせてもらったのですが、以前にお会いした教会員の方が私を見ても誰だか分かってもらえなかったのです。しばらく話しているうちに私だと気づき、「別人になってしまっていて分かりませんでした」と言われました。

本論３．友の存在の慰め（ここまでは）

彼らは七日七夜、ヨブと一緒に地面に座っていたが、その苦痛が甚だしく大きいのを見て、話しかける者は一人もいなかった。（2:13）

「七日」というのは一般的な喪に服す期間で、彼らはヨブが生きながら死んだような状態であること、死にたくても死ねないでいる様子をただただ見守るほかなかったのでしょう。ヨブは痒くて転げ回り、土器のかけらで全身を引っ掻き回していた。誰も何もしてあげられないのです。それにしても七日間もじっと傍で座り続けていたというのはちょっと信じられません。私が想像するところ、彼らは日頃ヨブの妻がやっていたであろうこと――食べ物を届けたり、衣類を交換したり――ということを代わる代わる手伝ったりしていたのではないか。夜中も苦しみ続ける彼の傍で彼らも寝たのでしょうか。限られた記事から読み取るほかはありませんが、少なくとも彼らはこの時、真にヨブの友であったのです。彼らの存在は、どんな言葉よりもヨブにとっての慰めになったことでしょう。

さて、ストーリーを先取りするようではありますが、３章ではずっと沈黙を貫いてきたヨブがついに口を開きます。彼は自分の生まれた日を呪うところから始めるのですが、彼の心の思いが口を突いたきっかけとなったのは、この友人たちの振る舞いにあったと私は想像しています。ヨブに対してどこまでも共感を示してくれた彼らは慰めとなり、ヨブは彼らが自分の心の思いを受け止めてくれるだろうと思ったのです。彼らなら分かってくれるに違いない。自分の人生をこれほど滅茶苦茶にされた方に物を申すのを受け留め理解してくれるだろう。如何に理不尽なことが自分の身に降りかかったか、そのことを彼らは十分に分かってくれているはずだ。それほどの信頼をもって、ヨブは語り始めたのです。

その内容については次回以降丁寧に学んでいく予定ですが、ヨブのそのような思いは脆くも崩れ去ることになります。友人たちは何と、ヨブの独り言にいちいちコメントを言い始めるのです。ヨブは彼らのそんな言葉を求めてはいません。聞いてもらえればそれでいいのです。ところが、彼らはご丁寧にヨブの思いに対して意見を述べ始める。しかも、ヨブがこのような目に遭ったのには何か原因があるはずだということまで言い始めるのです。彼らのそのような言葉は、ただでさえ苦しみのどん底にあったヨブの心の傷口に更なる塩を塗り込む結果となります。彼らが語る言葉の中には真理も含まれているだけに、事は厄介になっていきます。ヨブの思いはただ一つ、「自分は神の御前に正しく生きてきたのになぜこのような理不尽な苦しみに遭わなければならないのか」という叫びです。どこにも持っていくことのできないこの思いを神にぶつけ始めた。彼は神と対話を始めたのです。ところが、「友人」たちはヨブと神との対話に横槍を入れ、ヨブを苛立たせていきます。慰めに来たはずの人々がかえって災いをもたらす者となってしまう。神とヨブという関係が、彼らの言い分によって歪められていくのです。そのようなストーリーをこれから見ていくことになります。

少し先取りしすぎたかもしれません。しかし、今日の箇所に見られる友人たちの態度はヨブにとってふさわしかったということをここでは心に留めておきたいと思います。彼らは共感を示すことにおいてヨブの友であったのです。

【結論】

今日はヨブに降りかかる第三の試練の序論を見ました。この記事から、私たちは隣人と関わるときの教訓を学ぶことができるでしょう。苦しむ友がいるとき、その人を訪ねて行くことは当事者にとって慰めとなるかもしれません。そして、その人の心に寄り添うことができれば、それは訪問した意味が大いにあったと言えるでしょう。そのとき、私たちは自分の意見を押しつけたい誘惑に駆られるかもしれません。しかし、その言葉によって当事者を更に苦しめる結果とならないよう、注意深くありたいものです。古今東西、人間は共感を示すことが苦手な生き物であることを、ヨブ記は見事に描いています。同時に、共感されることがどんなに大きな慰めになるかということも。神は人をそのようにお造りになったのです。そして、共感を示せる人間に成長することを一人ひとりに求めておられるのでしょう。ヨブ記を読み進めていくにあたって、ヨブは友人たちにどう応えてもらいたかったのか、私たちならヨブの心の叫びにどう寄り添ってあげられるか、そのような視点をもってみてはどうでしょうか。

【祈り】

人の心の思いを知り給う天の父なる神様。人は「聞く」ということが苦手な生き物であり、真に「聞ける」ようになるには訓練が必要です。私たちも知らずしてヨブの友人たちがやってしまったようなことを誰かに行なっているかもしれません。やさしい心で傾聴できる者とならせてください。そして、その行ないの根底に、キリストの愛を置くことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
互いに心を聞き合うべき存在として人を造り給うた、父なる神の愛、
誰よりも大きな試練を味わい、すべての人に共感を示し給う、主イエス・キリストの恵み、
試練の中にある者を慰め、その心に寄り添い給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。